
錬金術師...始めました...

アトリエ工房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術師…始めました…

【Nコード】

N6369V

【作者名】

アトリエ工房

【あらすじ】

アトリエシリーズって意外と面白いと思う今日この頃・・・あの、アイテムをせこせこ作る面白さが堪らない。

とまあ、アトリエシリーズ・・・続くか？

プロローグ…なのか？（前書き）

息抜き作品1号

プロローグ…なのか？

『君今日から錬金術師ね』

「はい？」

『だ・か・ら錬金術師だよ錬金術師。聞いたことぐらいあるでしょ』
いや、錬金術師ってアレだろハガレンとかアトリエシリーズとかの

「いや、なんでぞ」

『なんかかつこよくない？』

「というかあんた誰？」

『禁則事項です』

うわゝスゲー殴りたい

『じゃあ行ってきたよ時代設定はかなり昔で、ああ何かしらの才能を（以下略）にしよう』

うん決めた。こいつ殴ろう・・・声しか聞こえないけど誓った。

『じゃあ、行ってら〜』

「いつか、絶対ぶん殴ってやるからな〜」

『三流悪党オーラがあふれ出るセリフに少々感激』

捨て台詞を残しどこかへ旅立ったのか？

目覚めたのは・・・どこだ(前書き)

主人公目覚めの時!いや、違ってますけどね

目覚めたのは・・・どうだ

ちわゝす転生者のセツナ・ウライムです。無論これ転生後の名前ね。いやゝビビったよ真面目にだって昨日の事は夢だと思って起きたら身体縮んでるし。窓から外出てみたらまあ、思った通りいつも見える街並みと違うし・・・神よ・・・これはあれか？何かしらの嫌がらせか？

「セツナゝ朝食だから速く来なさい」

聞こえてくるのは女性の声・・・多分この子の母親だろう

「はい」

まあ、無難に返しとくか…

『いただきます』

うん！ぶっちゃけあんまおいしくない・・・へ？ここはおいしいって言うところ？いや、だってあれだよ・・・なんだけど現代みたいに品種改良が良くないよ？と言うかカスの時代だよ・・・たぶん味がねなんていうか薄いのがぶっちゃけ現代日本人からしてみたら不味いよ。

「ああ、そうそうセツナ。食べ終わったら卵買ってきてくれる？」

「へい」

「・・・ねえ、セツナ？なんか変なものでも食べた？いつもと様子が違うけど」

やべー！いつも通りに返ししまった。俺（今）ぐらいの歳の反応は「へい」「じゃなくて」「はい」が基本だろうが

「別に何でもないよ」

「さてと、言われた通り買い物すんだし・・・あの声だけの言っただ・・・で、何言ってたっけ・・・なんか才能だとうだとうだ能力が・・・ああ、思い出せん」

「まあ、なんとかなるでしょ」

なんとかなるよ多分

「能力がどうだこうだ言ってたけど・・・思いつく限りやってみるか」

「まずは、転生者諸君大好きな赤さんから始めるか」

イメージは・・・勝利すべき黄金の剣カリバーンでいつか・・・いや、最初から難易度高すぎか？というか、この体に魔術回路って存在するか？

「えーと確か、創造の理念を鑑定し、
基本となる骨子を想定し、
構成された材質を複製し、
製作に及ぶ技術を模倣し、
成長に至る経験に共感し、
蓄積された年月を再現し、
あらゆる行程を凌駕し尽くし

ここに、幻想を結び剣と成す

！だっけ？」

そうしてイメージだけを頼りに剣を創りだす。

「・・・マジで出来たよ。でも、宝具もどきなんだよね。」

そう、出来たにはできたんだが・・・あれだね、神秘だっけ？が全く附属されてない欠陥品つまり、切れ味とか耐久度とかいいけど、神秘がない宝具つまり、宝具（笑）が出来たんだよね。

まあ、設計図も何もなしで作ったから当たり前なんだけど・・・この勝利すべき黄金の剣もどき。^{カリバーン}あえて言うなら笑うべき黄金の剣だね

「まあ、これでも業物の部類に入るからいつか・・・って言っても・・・俺剣なんか使えなくね？」

今更ながら気がついた・・・俺剣なんか使えないじゃんorz

まだまだ転生者の苦難は続く

目覚めたのは・・・どこだ(後書き)

我ながら・・・なんか微妙

旅立ちの日？

前回から5〜7年ほど経ちました。今はピチピチの13歳です。

え？跳びすぎ？

仕方ないじゃないさ。

勉強して、戦闘訓練して、食って寝る。そんな日常ですよ？

それよりも、最近気がついたけど、多分ここアトリエシリーズの世界だと思っただよね

理由は機械があるんだよね街並みは中世？ぐらいなのに。まあ、現代と比べたらカスだけど

それで魔法？魔術？の方面は投影の錬度上げだね。それ以外にもいろいろやったけどあんまし手ごたえがない。

それに今まで数えるぐらいしか使ったことないけどこの世界にはこの世界の魔法があるしね。

アトリエ流の魔法、僕も戦闘技能を学ぶときに教えてもらったよ・
・爆発したけど（泣）そして感じたけどFateとかネギま！の魔法の方がなんていうの？手ごたえ感じるからそっち方面の修行の方を重視してアトリエ魔法の練習してないんだよね

話は変わるが、ここ、アトリエシリーズのどれくらい昔なんだろう

ね？

もしかして、錬金術が全く無い遙か昔とか言わんよな？・・・あり
そうだけど・・・

と、まあそんなこんなでついに旅立ちの日？

「父さん、母さん行ってきます！」

「ああ、行って来い。そして二度と帰って来るな」

父よそれはないんじゃないか？それと、隠してた工口本を母さんに
教えて全部処分されたのをまだ根に持つてるのか

「いつてらっしゃい。危ないところには行っちゃ駄目よ。」

そして母よ危なくない冒険なんて存在しないのではないか？

「へい。ぼちぼち頑張るわ」

今、錬金術師（予定）の旅が今始まる！！なんちゃって

旅立ちの日？（後書き）

ようやく、ふりだし

やっぱりメインの方が書きやすい

錬金術師・・・誰もいない

さて、あれから数年たちもつ、年齢もそろそろ、20歳になります
あれから分かった報告としては、そもそもこの世界には現段階で錬
金術という者は存在しないということ。

これは、大陸も渡って調べたから間違いない。つまり、この世界は
アトリエシリーズの世界の多分、数百年ほど前なのだろう

そんなこんなで、旅してるうちに色々と成長したよ。主に魔法とか

ちなみ俺の戦闘スタイルはまず、投影魔術（偽）で白黒の双剣（コ
レが一番楽）を創りぶん投げて、壊れた幻想で爆破して雑魚は一層

強敵（主にドラゴンとか）は を10回ほど続けて、弱ったところ
をネギまの白き稲妻で麻痺させるか、雷の斧で首をぶった切って倒
す。

それはいいんだけど、戦ってる方が多くね？俺、一応錬金術師志望
なのに出ればアトリエの世界でハガレンの錬金使いてゝな。楽そ
うだし

Side ?

我は非常に暇だ、世界から賢者なんて呼ばれているが、暇だ、かなり前に不老の薬を作ったまでは、良かったんだが暇だ引きこもって300年ほど魔法等の研究をしていたが流石に200年程度でもう魔導は全て終えた、肉体労働は嫌いだし、ここ最近(100年ほど)趣味としていた新しいレシピ作りも終わった・・・さて、どうしたものか・・・ああちよどいいところに、誰か通ったし・・・

やべ〜迷った〜

皆さんいかがお過ごしでしょうか自分は今、絶賛迷子です
ああ、ちよどいいところに誰かいるし道を聞こう

「すみません、道をお尋ねしたいのですが」

「ん？なんかよつか？」

「道に迷ったんで出口を教えてくださいんですけど」

「ん？そうじゃな、うむ。ええぞ」

「ありがとうございます！」

「その代わり何かワシに面白いもんをくれ」

「面白いもの？」

「うむ」

面白いものね、投影で創ったラノベ渡せばいいだろ多分

「は、い、い、い」

「なんじゃこれは？本か？」

「ええ、多分面白いと思いますよ」

「……ちょっと見せてくれ」

で、数時間後。

老人？は見事にドブプリとはまっていた。

「こんな面白いのが人間の世界にはまだまだあるのか！？」

「ええ、まあ、自作ですけど」

「自作！これは主が造ったと言うのか！」

「……ええ、まあ」

嘘は言っていない彼は造ったと言ったから、書いてはいないが一応俺が造ったし

……喜んでもらったようで何よりだ

「それより道を」

「よじワシと来い」

「は？」

「いいから」

「えっ！ちよ待」

拝啓、父と母へ息子は老人に拉致られました

修行？いいえ拷問です

「さて我が弟子（仮）よ」

「いやいや、まてや爺」

「口が悪いな」

「拉致られて、不平不満の無い奴はいないと思っぞ」

といつかこの爺さん誰だよ…

「うむ、ワシはドルイドという」

「人の心を読むな」

ドルイド？はて、どこかで聞いたような？なんか、どっかの物語の
・
・

「まさか、あんた『シャールンの書』に出てくる賢者ドルイド？」

「ん？まあ、そうなんじゃないか？しかし、シャーレンとはまた懐かしい名前を聞いたな」

ちなみに『シャーレンの書』というのにはありがちな魔王を倒す勇者の物語で、この大陸ではまあ、誰でも知っている話だな・・・本当だったんだなあの話

「で、俺に何の用だ？」

「うむ、ワシは知つてのとおり魔導師でな、不老の秘薬を作つたまでは良かったんだが、やる事がなくなつてしまつてな」

「そこで、たまたまいた俺が拉致されたと」

「そおいうことじゃ。だが悪い話ではないぞお主少し魔術をかじっているだろう」

「まあな。それがどおした」

「つまり、わしに弟子入りすれば賢者とうたわれたワシの技術などを継ぐことができる。悪い話ではないだろう」

確かに悪い話じゃないな・・・錬金術師志望といっても何をすればいいのか分からない。この爺さんの知識ならそれに準ずるものがあるかもしれない

「わかった受けるよその話」

「そうかそうか、ではこれを吞め」

手渡されたのは一粒の錠剤

「何だこれ？」

「いいから吞め」

「分かったよ」

呑んだはいいが何の変化もないな

「今飲んだのは不老の秘薬じゃ」

「ちょっと待て」

は？イキナリ何言っちゃってくれてんのこの爺さん

「てことは俺すでに不老？」

「そお言っことだな」

まあ、いつか悪いことじゃないだろうし・・・多分

「それはそうと早速修行を始めるか」

「ああ」

~~~~時は廻り~~~~

「だ〜分かるかこんなの」

「何言っておるこれは『魔導事始』という本でそれなりの魔導師はこれで学習するもんだぞ」

「それはあんたが現役ごろの話だろ！コレ全部古代語で書かれてて何書いてあるか全く分かんないんだけど！」

「我がままじゃな。じゃあ、ほれ」

渡されるのは見ただけで吐き気がするほどのクソ分厚い辞典

「それで一語一語解読してから読みなおせ」

は？ナニヲオツシヤラレテイルンデシヨウカコノクソジジイ

「出来るわきゃねーだろ！」

「まずそれがわからないと、始められんからな」

この悪魔めが

なんやかんやで俺の修行という名の拷問は始まったとさ

修行？いい拷問です（後書き）

主「あのくそ爺が」

作「落ち着けて」

主「ありえねえだろ！なんで古代語！現代語にしてほしかった」

作「それは無理と言うもんだぞ主人公よ」

主「お前が頑張ればいいんだよ作者」

作「ガンバ！」

使い魔召喚！なにが来る！

「終わった〜」

遂にやり遂げた一語一語解読していき遂に！遂に！

「読みおえたぞ〜」

「なんじゃ、騒々しい」

「ああ、ようやく終わったんだよ」

「そうか、では・・・」

・・・まさか・・・

「うちの書庫にある本全部読み終える」

は？あの優に1万冊越えてるあれを？・・・んなアホな

「冗談きついで爺」

「じゃあ、頑張れ」

ヌマジでか・・・

~~~~時は流れ~~~~

「あ〜なんか今なら悟りを開けそうな気がする」

「なんじゃ、終わったか・・・次は」

今度はなんだ？いい加減に休ませてほしい

「使い魔を召喚するか」

へ？使い魔？あの、黒猫とかああいうやつ？・・・凄く欲しいです

「なんじゃ、その輝いた目は・・・」

「いいから、どうやって呼ぶんだ？」

「まずは・・・って何勝手に始めてる！」

「気合いで何とかなるだろ・・・多分！」

「よいか、まずは正式な魔法陣を・・・」

「ゼロ魔式で行くぜ！」

「話を聞け！」

テンションは最高にハイってやつだZE

「力を司るペンタゴン。我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ！」

私が召喚の呪文を唱えると正面に鏡が現れた。せ、成功だ！・・・だが、何故か鏡が優に10m越えてるんだけど・・・どんだけでデカいんだよでも・・・何が来るかなワクワク

そして現れたのは王の如き威厳を放つ竜・・・俺はこいつを知っている

「・・・・・・・・」

俺は絶句した・・・ありえない。ゼロ魔の使い魔の召喚は、“持ち主にふさわしい力を持った使い魔”が召喚される・・・だが、俺が呼び出したのは竜王バハムート・・・某最終幻想において“最強”クラスの力を持つ召喚獣・・・俺とは釣り合わない

『人の子よ我を呼び出したのはそなたか？』

「ああ、それは間違いなが手違いじゃないか？」

『否、汝は我を呼び抱いたのだ。そこに偶然などありえぬ』

「つまり、俺は竜王。お前に足る器だと？」

『否、今の《・・・》主では我を従えるに足りぬ』

当たり前と言えば当たり前だな・・・

「今の《・・・》とはどお言っことだ」

『それは汝が未来、汝の器は未だ矮小なれど、いつかは我をも収めるものとなるっ』

「可能性ね」

『だが、主も手ぶらでは恰好がつくまい・・・我が眷属を汝が傍に送ろう。我が眷属より汝の竜を選ぶがいい』

『その者は智恵の竜なり。汝に『智』を与えよう

その者は力の竜なり。汝に『力』を与えよう

その者は心の竜なり。汝に『魅力』を与えよう』

「俺は・・・」

使い魔召喚！なにが来る！（後書き）

いつたい、どれを選ぶのか・・・

新たな旅立ち（前書き）

この小説のこと忘れてた・・・

新たな旅立ち

「まったく勝手なことしよって」

「だが、反省もしていないし後悔もしていない！」

「……もういいや」

「さてと、とりあえず使い魔は……どこにいるんだ？」

「ああ、俺の体と同化してるからな」

「ふむ、持ち主と同化する使い魔か……興味深いな」

研究したいと言っつなよ……俺が解体バラされるから

「で、この次は？」

「ああ、これでもう終了じゃ。もう教えることは大体無い」

「えーこれで終了！っていうか大体ってなんだよ」

「些細なことじゃ」

全くこの爺さんは・・・

「今までお世話になりました」

「達者でな」

ここから俺の本当の物語が始まる！・・・・・・なんかキャラじゃないな

新たな旅立ち（後書き）

このまま次行きます

外伝 そして伝説に（前書き）

外伝

外伝 そして伝説に

私は学者のヘンリー・カーライルという。

今日は、伝説の人について語ろうと思う

そう、彼の【賢者】の話だね

【賢者】を称して、『この世全てを知る者たち』と呼ぶ事もある。

これは事実かどうかは定かではない。

彼らは永遠の時を生き人々に文明を与えたとされている。

だが、その中でこの世界に最も偉大な文明を与えた者は

この世界に魔術をもたらした『シャーレンの賢者』ドルイド、

そして錬金術と呼ばれる技術を与えた『黄金の賢者』セツナ・ウライム

錬金術とは、その名の通り金を創り出す技術だ。だがこの技術は様々な場所

に応用され、今では薬を始めとした日常品さえも、創り出すことが可能となった

だが、この技術はとてもなく難しくこの分野を収めた人は、そうとうの秀才だ。話は変わるが、錬金術は、この世界に存在する物質を緑、青、赤、白の4色に分類し、そこから色々な工程をたどり様々なものに変化する。私も詳しくは知らないが、これを専門に研究したりする者を錬金術師と呼ぶ。

そして、錬金術師達には目標がある。なんでも、世界の心理を解き明かすことらしい。かなり無謀な挑戦だと私は思うがね。そして、金は上位の錬金術師でなければ錬成できない。なら、何故、錬金術と呼ぶのだろう。私的には錬成術のほうが合っているともうのだが、
・そして、錬金術師たちから、セツナ・ウライムは神のごとく崇められている。

だが、初期の頃は錬金術もこれほど盛んではなかったが、なぜそれほどまでに名が知れ渡ったのかと言うとその理由は、人間の馬鹿さ加減の象徴。これに尽きる。

とある国が、錬金術を使い、街一つ滅ぼすほどの爆弾を大量に作成して投下したりしたのが原因と言えよう。その国が錬金術を悪用した数は両手じゃ数えきれないね。

それから、各国がこぞって国力を高めようと、錬金術を使い兵器を生み出していった。

そして、遂には死者蘇生という、禁忌まで犯そうとする者たちがあらわれた。

悲しいことだね。人々の生活を豊かにするために【賢者】の技法は、人の愚かさによって悪用されたのだからね。

だが、ある時、どこからともなく現れた【竜王】と呼ばれる存在に錬金術を悪用していた国は壊滅状態に陥った。それから、錬金術は必要最低限しか、軍事には使われていない。

大変よいことなのだが、私的には【竜王】の正体の方が気になるね。以上で私の説明は終わりだ。

外伝 そして伝説に（後書き）

ちよつとご都合主義

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6369v/>

錬金術師...始めました...

2011年10月10日19時27分発行